

# 深い学びを支援するための思考ツール活用法の提案

鳴門教育大学大学院 高度学校教育実践専攻 教職実践力高度化コース 指導教官 泰山 裕

土佐市立蓮池小学校 教諭 中村 由美

## 1 はじめに

AI が飛躍的に進化している。これからの子供達が成人して活躍する頃には、一体どんな社会になっているであろうか。少子化・高齢化問題、グローバル化の進展や絶え間無い技術革新等により、社会環境や雇用環境は大きく急速に変化して、予測困難な時代と言われている。

このような激しく変化する時代だからこそ、子供達が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決することや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

長年に渡り学校教育は、日本に限らず、領域固有な知識・技能、いわゆる「内容」の習得を最優先の課題として進められてきたと言われている。しかし、それが最終ゴールではないだろう。習得した知識や技能を活用して、仲間と協働し、これから起こり得る様々な問題に主体的に向き合い、新たな知識を生み出し解決する力を身に付け、未知の社会を生き抜き、より良い豊かな人生を送って欲しいと願っている。

### (1) 教育の方向性

背景に示した状況を踏まえ、新学習指導要領でも、予測困難な時代において、よりよい未来の社会を築き、自らの人生を切り拓くことができる資質・能力の育成が中心課題となっている。新しい教育課程では、資質・能力の三つの柱が示され、その育成に向けて、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が示された。平成 29 年 3 月の小学校学習指導要領の改訂では、深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることや、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることが教師に求められた。

そして、各教科等の固有性や本質を視野に入れた質の高い学びを目指すことが明確になり、「深い学び」をはっきりさせる為に各教科等の特質に応じた見方・考え方が示された。

### (2) 先行研究

ア 深い学びとは、澤井（2017）は概念的知識の獲得と捉え、生きて働く、後々使える知識（概念的知識の形成）の重要性について述べている。また教科目標を実現する学びでもあり、より深く理解させる為にどうするのかは教師に求められていると述べている。

奈須（2017）は、知識が関連付いてネットワーク化する、構造化すると素朴に考えると述べている。二つの意味する知識の関連付けがあり、一つはすでに身に付けていたり、曖昧で漠然とした知識が学校の学びで結び付くもの。もう一つは教科の勉強として得た知識同士が結び付くものである。その知識が関連付き構造化することだと言っている。

田村（2018）は知識・技能が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動する状態に向かうことだと述べている。そして、知識・技能の構造化について、①宣言的な知識がつながる②手続き的な知識がつながる③知識と場面がつながる④知識が目的や価値、手応えとつながる、の4タイプがあると述べている。

3人とも概念的知識の形成の重要性について述べており、奈須と田村は、形成には関係付けや、

関連付けが大事だと言っている。そこで深い学びとは『情報や知識を関係・関連付け、構造化し自分の思いや考えを基に創造する学び』と定義付けた。これからの時代、状況に応じ最適な解決策を探り出す力や、様々な知識や情報を活用・発揮しながら、自分の考えを形成・創造したりする力が求められている。そこには「考える」ということが中心にある。子供達の知識と知識を結び付け、考えることを手助けしてくれる思考ツールが有効であると考えた。

イ 思考ツールとは、黒上（2012）は、「頭の中にある思いや考えを視覚的に表してくれるもの。それを客観的に見て新しい考えをもつ第一歩である。それまで繋がっていなかった知識と知識を繋いでみるとどうなるのかということを考えることができるようになる」と述べている。

田村（2017）も、深い学びを実現する為には、「可視化と操作化が『自ら学び、共に学ぶ』子供の具現することに繋がる思考ツールを活用することが考えられる」と述べている。

これらのことから、定義付けた深い学びには「考える」ことが具現化され可視化され、知識同士を結び付けることができる思考ツールに着目する。

思考ツールにはいろいろな種類がある。黒上は、「思考ツールを小さい頃から繰り返し使うことで、知識と知識を結び付け『考えること』についての訓練をすることになる。その結果、自分自身の考えを他人に対しても表明できるようになる。表明することそのものに自信がもてるようになる」と述べている。ツールを適切に使用することで、誰が何を考えているか可視化される。そしてそれは、一部の子供だけの考えや話し合いに終始する授業の改革に役立つものと考えた。思考ツールでどのような考え方が具現化するのか、思考ツールから思考スキルへの対応表より考えた。思考スキルとは、小学校の学習活動に必要な、思考力・判断力・表現力を身に付ける為に必要なスキルを具現化したものである。泰山（2012）は、「思考を具体的に記述した言葉を『思考スキル』と呼び、『考える』という言葉をもとにすることで、子供により分かりやすい指示や支援をすることができる」と述べている。泰山らは、学習指導要領とその解説本を教科横断的に検討することで、19の教科共通の思考スキルを抽出した。今回の授業実践において、単元目標との関連を図り、多面的に見る・比較する・分類する・関係付ける・構造化する・評価するに焦点を絞り、深い学びが支援されるための思考ツール活用法の研究を進める。

### (3) 小学校における国語科教育の課題

小学校学習指導要領（平成29年告示）国語編では、全国学力・学習状況調査の結果において、「文における主語を捉えること」「文の構成を理解したり、表現の工夫を捉えたりすること」「目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすること」などに課題があると明記されている。PISA2015では、読解力の平均点が前回調査よりも低下しているという分析もされている。中央教育審議会答申においても、「視覚的な情報と言葉との結び付きが希薄になり、知覚した情報の意味を吟味したり、文章の構造や内容を的確に捉えたりしながら読み解くことが少なくなっているのではないか」という指摘や、「教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあり、文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である」と述べられている。

これは、「読むこと」領域において、文章の構造や内容を読み解けないことに課題があり、ものの見方・考え方の概念である、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考するのか」という物事を捉える視点や考え方に課題があるのではないかと感じた。

## 2 研究の目的

そこで本研究では、小学校国語科説明的な文章「読むこと」領域において、見方・考え方を働かせながら、深い学び（情報や知識を関係・関連付け、構造化し、自分の思いや考えを基に創造する）を支援するための思考ツール活用法を提案することを目的とする。

### 3 研究内容

#### (1) 研究の構想

##### ア 研究対象

置籍校6年生児童37名(単学級)

##### イ 研究の手立て・計画

小学校国語科6年、説明的な文章「読むこと」領域において、見方・考え方を働かせながら、深い学びを支援するために、指導事項に沿った思考ツールを検討し活用する。また、授業実践2では、複合単元であり、第4次に関する「書くこと」領域の指導事項も踏まえ、対象と言葉を関係付ける思考ツールを活用する。

表1 研究計画

4月	思考ツールの初期指導
5月	アンケート調査1回目、授業実践①
6月	授業実践①後アンケート調査2回目
9月	授業実践②
10月	授業実践②後アンケート調査3回目

#### (2) 検証方法

指導事項4構成の「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」に沿い、個々の思考ツールの記入や成果物との関連、振り返りやアンケート調査を基に、思考ツールを活用することで、見方・考え方を働かせながら深い学びが支援されたかを検証する。その際、国語の意識調査とツールや成果物との妥当性を図る。そしてその学びが支援されているのは、思考ツールが役立っているのかを明らかにするために、思考ツールのアンケート調査を行い検討する。

#### (3) 授業実践

光村図書第6学年の以下の教材を扱う。(※指導案は巻末資料に添付)

表2 実践計画

	光村図書6年 教材名	活用ツール
授業実践① (全9時間)	「笑うから楽しい」 「時計の時間と心の時間」	マトリックス くらげチャート ピラミッドチャート Xチャート PMI お魚ボン図
授業実践② (全10時間)	「『鳥獣戯画』を読む」 「この絵、私はこう見る」 ※第4次では風神雷神図を扱う	ベン図 Xチャート Yチャート(4回) PMI(2回)

#### (4) 研究の結果と考察

思考ツールに、正確に記入されていた子供達を例に挙げ、成果物やツール、振り返りやアンケート調査と関連付けながら考察する。

##### ア 授業実践①の結果と考察

構造と内容の把握「事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を把握すること」の視点より、くらげチャートを活用し要旨まとめを行った。1回目の要旨まとめでは、要旨とは言えない不十分な子供達が10名いたが、くらげチャートには、頭の部分(主張)を基に足部分(根拠)を叙述から抜き出せていた。言葉と言葉の関係を捉え、問い直して吟味していた。2回目の要旨まとめも子供達は1回目と同様、くらげの頭部分の主張から足部分の根拠の関係を捉えたり、問い直したりして記入できた。その際、要旨まとめに必要なと思われる箇所や大事な箇所には印を付ける姿が全員に見られた。印は、同じ言葉や大切なところに付けていた。同じ言葉というのは、「筆者が繰り返し何度も述べている言葉は大事だ」と既習学習より得ている知識だ。これまでの学習と関連付けて学んでいた。また、1回目より要旨まとめができていたCさんは、2回目は「要旨まとめが簡単にできた」と振り返った。言葉同士の関係や段落相互の関係もしっかり捉えられており、知識同士が関係付いている。言葉による見方・考え方が体系化していると推察する。授業実践後のアンケート調査の結果「思考ツールを使うと要旨まとめするのに役に立つ」の項目で「そう思う」65%、「どちらかといえばそう思う」32%と肯定的評価が97%であった。しかし、表3の項目A1とB1の内容理解面では、4月から5月にかけての肯定的評価の数値が下がった子供達がどちらも30%いた。これはこれまで国語科で何となく考えていたことや、

分からなかったことについて、捉える視点が明確に理解できだし、これまでの自分の見方・考え方と、今の自分の見方・考え方がメタ認知されたからであると考えている。肯定的評価の数値は下がったが、子供達の言葉に対しての見方・考え方の知識や技能は高まったのではないかと推察する。

イ 授業実践②の結果と考察

構造と内容の把握の視点より、「『鳥獣戯画』を読む」では、筆者のものの見方を捉えるため、対象と言葉との関係に着目する手立てとしてYチャートを3回活用した。「この絵、私はこう見る」では「風神雷神図」を読み評価し、成果物を共有した。この複合単元で計4回Yチャートを使った。1回目は子供達の様子から一斉に記入しながら進めた。2回目はチャートに慣れ、すぐに書き始め、評価欄にしっかりと記入できた。しかし、事実欄に記入ミスが多かった。原因は叙述のみに意識が向き、対象（絵）はあまり見ず、評価欄に記入していた。12%の子供達以外は事実と評価の区別ができていたが、対象と言葉を関係付けるという意識が低かった。指摘すると気付けた。3回目より、個人で対象と言葉の関係を正確に捉えて記入できだした。3、4回目はYチャートより成果物に繋げ、自分の絵の読みをまとめた。DさんのYチャートの評価欄は、3回目と比べ4回目の記入量が増え、対象と言葉との関係を捉えることが汎用的なものとなっている。これは、田村(2018)の述べる手続き的な知識が繋がったものだと考える。表現の工夫の効果を入れ、知識と知識を関連付けて自分の読みを表現できた。Dさんは表3項目F1の回答が、4月は、「そう思わない」、5月「どちらかといえばそう思わない」、10月「どちらかといえばそう思う」となり、項目A1の回答も肯定的評価と変容した。またEさんは、4月より内容理解や書くことが得意であると回答していた。Eさんの3回目と4回目の成果物を比べると、ストーリー性のある読みへと発展していた。この様な伸びの要因として、共有から4回目の成果物へ繋がったと捉える。PMIを用い共有する際、友達との考えの違いや、面白さに気付き、次の活動への意欲をもった。PMIにより情報が可視化され、自分ができていなかったところへの気付きから、4回目の成果物へと知識を関連付けたのである。自分の考えを深め、広げることができ、創造へ繋がったと推察する。

ウ アンケート調査結果

全3回のアンケートを実施した。その結果より考察する。

全てのアンケート項目で、5月の肯定的評価の割合が4月の肯定的評価の割合と比べて低かった。

そして、表3のC1「段落や段落相互の関係を理解するのは得意だ」は、10月、更に低くなっている。しかし、他の項目A1、B1、D1、E1、F1、G1については4月の肯定的評価の割合よりも、10月の肯定的評価の割合が高くなる結果となった。

それと関連付けて、5月授業実践1の後と10月授業実践2の後に行った思考ツールは役立つのかについてのアンケート調査の結果と照らし合わせて検証する。

(ア) 構造と内容の把握

表4 思考ツールの意識調査

思考ツールを使うと文章の内容を理解するのに役立つ	肯定的評価の割合				
		そう思わない	どちらかといえばそう思わない	どちらかといえばそう思う	そう思う
	5月	3%	0%	27%	70%
10月	0%	0%	11%	89%	

思考ツールを使うと内容理解に役立つのでは10月「そう思う」と答えた子供が89%と高くなり、100%の子供達が内容理解に思考ツールは役立つと回答している。肯定的評価A1（表3）も92%である。構造と内容の把握の視点において、思考ツールに正確に書き出し、ツールと成果物がリンクしてまとめられた子供達は、37名中33名であった。4名については、国語科における基礎的な知識の理解習得が必要であるこ

とが分かった。しかし、全員の子供達が思考ツールにより、言葉と言葉や対象と言葉の関係を意識して捉えること、問い直すことを通して、見方・考え方が理解できだしたと考える。頭の中の曖昧な考えが、思考ツールによって可視化され、知識と知識を関係付けていると推察する。くらげチャートやYチャートを活用することで、国語科の見方・考え方を働かせながら深い学びを支援することができたと捉える。

(イ) 精査・解釈、考えの形成

ここでは、自分の考えを整理してまとめることと、事実や意見を区別して引用したり、図やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することを繋げて考察する。

表5 思考ツールの意識調査

思考ツールを使うと自分の考えを整理するのに役立つ		そう 思わない	どちらかとい えばそう思わ ない	どちらかとい えばそう思 う	そう思 う
	5月	3%	0%	19%	78%
	10月	3%	5%	14%	78%

10月の肯定的評価D1（表3）の結果は76%と高くなっている。しかし、「思考ツールを使うと自分の考えを整理するのに役立つ」（表5）では数値にあまり変動がない。「思考ツールを使うと自分の考えを整理するのに役立つ」（表5）では5月に「どちらかといえばそう思う」に評価していた2名が「どちらかといえばそう思わない」と評価が下がった。この2名のアンケート「思考ツールを使うと説明文を書くのに役立つ」（表6）

表6 思考ツールの意識調査

思考ツールを使うと説明文を書くのに役立つ		そう 思わない	どちらかとい えばそう思わ ない	どちらかとい えばそう思 う	そう思 う
	5月	3%	11%	35%	51%
	10月	3%	0%	16%	81%

では、2名とも「どちらかといえばそう思う」と肯定的評価であった。この2名はツールに記入する際、知識を言葉にするという技能の部分が苦手なのではないかと考える。表5の「どちらかといえばそう思う」と意識の変化が見られなかった子供達の中にも、この2名と同様に授業中、ツールに書き込む際、悩んでいる様子が見られた。しかし、この2名のツールや成果物は他の子と同様に、対象と言葉との関係をしっかりと捉えられていた。ツールを用いることによって、苦手な部分を可視化することができ、それを基に自分の考えをまとめ、書くことができ、子供達の学びが支援されたと推察する。「思考ツールを使うと考えの整理に役立つ」（表5）の10月の肯定的評価は下がったが、上記の2名も含め、しっかりと考えることができている。この知識や技能を繰り返し思考することによって、知識と知識が関係付いており、自然と国語科の見方・考え方が汎用的なものになってきていると捉えられる。

表3、F1の項目10月の肯定的評価は57%とまだまだ低い結果である。しかし表6では、97%の子供達が思考ツールは説明文を書くことに役立つと肯定的評価である。書くことに苦手意識があった子供達が、精査・解釈の視点よりXチャートで、必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたり、またそれにより、自分の考えが伝わるように文章の構成や、書き表し方を工夫することを意識し始めている。そして、ピラミッドチャートやお魚ボーン図により、自分の頭の中にある知識を、しっかりと繋ぎ合わせている。それが「書くこと」への評価と繋がっていると推察する。

必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりして、成果物に工夫してまとめられているのは、やはり思考ツールによって、子供達の頭の中にある多くの知識を、しっかりと繋ぎ合わせたのだと推察する。そして、新しい考えへと創造が広がっていると考える。それは深い学びを支援していると捉える。

(ウ) 共有

ここでは、「話すこと・聞くこと」に着目する。話し合いは話すことと聞くことが交互に行われる言語活動である。新学習指導要領の指導事項「話すこと」「聞くこと」と「読むこと」の（共有）とPMIの感想との関連を図りながら考察する。

表7 思考ツールの意識調査

思考ツールを使うとペアや全体で話すのに役立つ		そう 思わない	どちらかとい えばそう思わ ない	どちらかとい えばそう思 う	そう思 う
	5月	3%	5%	35%	57%
	10月	0%	6%	24%	70%

10月の肯定的評価G1（表3）の結果、75%と高くなっている。話すことへ苦手意識がある子供達は、「話すことが分からない」と言うことがある。話す内容が分からないこと以外に、話す内容を整理して順序立てて話すことが苦手だとも考える。

思考ツールの感想（PMI）で、役に立つと答えた子供達の評価の圧倒的に多かったのが「使いやすさ・書きやすさ」であった。これまで、学習活動の聞く場面で、何を聞いてよいのか曖昧だった子供達の意識が、PMIの3つの視点に絞られ記入することで記入者の知識も、より明確になったと考えられる。それは聞き手の内容理解にも繋がっていると捉える。PMIに記入したものは視点別に分けられており、後から見直す時に分かりやすく伝えやすかったと感想が多数見られた。子供達は、PMIを使うことに慣れてくると、記入する量も増え、質も高まってきた。それを伝え合うことで、互いに知識を広げたり、深めたりすることができた。友達の発表を聞きながら、言葉と言葉の関係をしっかりと繋げて聞き取り、知識と知識が関係付き、新たな自分の知識へと構造化されたものと推察する。以前、「話すことが分からない」と言っていた子供達も、要点を絞って聞くことにより、伝える内容が整理されたことが、話すことへの自信に繋がり、アンケート調査の肯定的評価の数値が高くなった結果だと考える。

また、記入した思考ツールを残しておくことで、自分も友達の良い所を真似する。それを次の自分の成果物に生かした子供達もいた。以前はできなかった事が、対話により、別々の事実的な知識を繋げている。このように友達と話すことにより、知識が構造化している。そしてそれが、目的や価値への知識の構造化とも関連していると考えられる。その姿は深い学びだと推察する。

これらの子供達の姿やアンケートから、本研究で定義づけた見方・考え方を働かせながら深い学びが支援されたかは、思考ツールを活用することで、関係付け・関連付け・構造化・思いや考えをもとに創造することを支援していたことが明らかになった。

#### 4 まとめ

本研究の目的は、深い学びを支援するための思考ツール活用法を明らかにして提案することが目的であった。先行研究を基に深い学びとは、「情報や知識を関係・関連付け、構造化し、自分の思いや考えを基に創造する学び」だと定義付けた。小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編に明記されている、指導事項の構成（説明的な文章）の視点に沿って、国語科の見方・考え方を働かせながら、深い学びが支援される思考ツール活用法を以下3つの視点で提案する。

##### (1) 構造と内容の把握

くらげチャート、Yチャートを活用することで、主張や根拠、事実と評価等の関係に着目して捉えたり、問い直したりして、知識を関係付けたり、既習学習と関連付けながら学び、自分の新たな考えを知識として構造化することができた。くらげチャートやYチャートは深い学びを支援するには有効である。特にくらげチャートは、要旨を把握するために、多くの情報を関係付け、情報が絞られ、可視化され、要旨を把握することに難を示す子供達にとっては、見方や考え方を理解させ習得させることに繋がり、汎用的な力となっている。それは、学びに向かう人間性等にも繋がる。また学力面で内容理解の低層群の子供達も対象と言葉の関係を理解できた。要旨まとめを自力でやり遂げた達成感も得られ、後の学習の意欲へと繋がっている。

##### (2) 精査・解釈

Xチャートは、文章と絵などを結び付ける等して、必要な情報を見付けたり、論の進め方について捉えたりするのに、段落ごとの大事な言葉等をチャートに分類し、分類された言葉同士を関係付けることに有効であった。捉えにくい表現の効果がチャートで可視化され、意識することができ、それを自分の考えの形成に関連付けて用いることができたことは、深い学びを支援している。獲得した、知識や技能は、今後の汎用的な知識として体系化されると考える。

### (3) 共有・考えの形成

今回、子供達の深い学びが支援されたことが明確に分かりやすかったのは、PMI の活用によるものである。共有することで、子供達は無意識に、自分と友達のを考えを比較していた。友達との意見の違いから「面白い」と捉え、もっと他の見方を探しだした。そして、自分に足りないものは何かを考え、次に生かすことができた。PMI によって子供達の知識同士の関係付けや、これまでの知識と今日の学びが関連付いている。そして、自分の考えが広がり、深まり、新たな考えを構造化しており、後の学習に関連付いて生きてきている。思考ツールにより、考え方がメタ認知され、学ぶ意欲へと繋がっている。PMI は深い学びを支援するのにとても有効だと捉える。

これらのことから、各指導事項に沿って、思考スキルに応じた思考ツールを活用し、考えを可視化することで、一人一人の情報や知識の関係付けや関連付けに繋がった。そして、一人一人の考えたことを共有することで、さらに子供達は深く考え、創造し深い学びが支援されることが分かった。

それには、各領域の指導事項等との関連と子供の実態を図りながら、深い学びが支援されるように、子供達の獲得する知識をイメージした思考ツールを選択・活用することが大切である。

### (4) 課題と展望

#### ア 段落相互の関係を意識して、内容理解に結び付ける思考ツール活用法の検討

今回、アンケート調査の「思考ツールを使うと段落相互の関係を理解するのに役に立つ」という肯定的評価は高かったが、表3のC1「段落相互の関係を理解するのは得意だ」の項目では、4月から10月にかけて評価が下がった。これまで子供達は1年時より、段落構成を表で整理してきたので、習慣化されていた。しかし、その有用性については、あまり実感がなかったと思われる。マトリックスを完成させた事で、子供達の思考は一旦止まっていたと考えられ、次の活動へとその知識が生かされてなかったと捉える。各段落の内容を把握し、それを基に要旨まとめをする際に、段落相互の関係を意識させながら、どの段落に焦点を絞れば良いのか、チャート同士を関連付け、知識同士を関係付ける子供達の内容理解に繋がる支援方法を探っていきたい。

#### イ いろいろな場面で、見方・考え方を働かせる思考ツール活用法の検討

今回の授業実践で、子供達にどんなツールを使用すれば良いか問いかけた。しかし、思考スキルを意識して答えられる子供は少なかった。思考ツールを汎用的なものとするには、時間が短かったたし教師側の意識付けが弱かったと考えられる。いろいろな場面で、子供達が自分で考えられる力を付けるためにも、どんな見方・考え方をすれば良いのかということ普段から意識付け、汎用的なものにしていきたい。また、そのためにも、各教科での基本的知識を、しっかりと子供達に身に付けさせていくことが前提である。

#### ウ 文学的な文章での深い学びを支援するための思考ツール活用法の検討

今回、説明的な文章を検証した。文学的な文章での、登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えるために、どのように知識同士の関係や関連付け、構造化を支援するための思考ツール活用法について探っていきたい。

来年度より、高知県の小学校国語科で扱われる教科書は、県下全域で「東京書籍」となった。今回は置籍校での教科書の扱いが光村図書となっていたので、光村図書にある教材を扱った。しかし、国語科の見方・考え方を働かせるという意味では、どの教材を使っても同じことだ。教科書を学ぶのではなく、教科書で学ぶのだ。特に若い先生達にも、子供達に見方・考え方を働かせて、深い学びをさせられるような指導力を身に付けて欲しいと思っている。今回の研究がその一助になればいいと考えている。今後、東京書籍の代表的な教材や、文学的な文章での思考ツールの活用方法も研究し、子供達に深い学びができるよう支援していきたい。

子供達に付きたい力とはどんな力なのか。これからの社会を生き抜いていくために必要な力を、教師自身が各教科領域の力と関連付けてしっかりと捉え、子供達がこれからも使える知識として習得させ、見方・考え方が汎用的なものとなってくれることを願っている。

## 引用・参考文献

- 田村学 (2018) 『深い学び』. 東洋館出版社
- 澤井陽介 (2017) 『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』. 東洋館出版社
- 全国国語授業研究会・筑波大学附属小学校国語研究部 (2017)  
『国語授業における「深い学び」を考える』. 東洋館出版社
- 全国国語授業研究会・筑波大学附属小学校国語研究部 (2018)  
『定番教材で考える「深い学び」をうむ国語授業』. 東洋館出版社
- 黒上晴夫・小島亜華里・泰山裕 (2012) 『シンキングツール—考えることを教えたい—』.  
NPO 法人学習創造フォーラム
- 田村学・黒上晴夫 (2013) 『考えるってこういうことか! 「思考ツール」の授業』. 小学館
- 関西大学初等部 (2015) 『関大初等部式思考力育成法ガイドブック』. さくら社
- 田村学・黒上晴夫 (2017) 『田村学・黒上晴夫の「深い学び」で生かす思考ツール』. 小学館
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領解説 総則編』
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領解説 国語編』
- 奈須正裕 (2017) 『平成 29 年版小学校新学習指導要領ポイント総整理総則』. 東洋館出版社
- 吉田裕久・水戸部修治 (2017) 『平成 29 年版小学校新学習指導要領ポイント総整理国語』.  
東洋館出版社
- 水戸部修治 (2018) 『小学校新学習指導要領国語の授業づくり』. 明治図書出版
- 齊藤一弥・高知県教育委員会 (2019) 『新教育課程を活かす能力ベースの授業づくり』. ぎょうせい
- 泰山裕・小島亜華里 (2011) 『思考スキルに焦点化した授業設計のためのパンフレット』.  
園田学園女子大学・関西大学大学院
- 奈須正裕 (2017) 『「資質・能力」と学びのメカニズム』. 東洋館出版社
- 嶋野道弘 (2018) 『学びの哲学「学び合い」が実現する究極の授業』. 東洋館出版社
- 澤井陽介 (2019) 『教師の学び方』. 東洋館出版社
- 香川県教育委員会 (2018) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践事例集小学校編  
中野晶仁・古園正樹・下戸勇介 (2018) 「国語科の主体的・対話的で深い学びを促す学習指導」  
『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』. 27 巻, pp. 347-354
- 筒井泰登・荒川尚・脇山英靖 (2016) 「確かな読みを育てる国語科学習の開発—読解力を高める言語活動  
の工夫—」『佐賀大学教育実践研究』. 34 号, pp. 355-364
- 小松司 (2014) 「小学校国語科中学年『読むこと』における段落相互の関係を捉える力を自覚できるよう  
にする学習指導の工夫」. 広島市教育センター
- 川田英之・大西小百合・山本茂樹 (2014) 「中学校国語科における思考ツールを使った読みの授業実践的  
研究」『香川大学教育実践総合研究』. 29, 1-14
- 川田英之 (2016) 「国語科の書くことが困難な生徒へのシンキング・ツールによる支援の効果の検証」『香  
川大学教育実践総合研究』. 32, 1-14